

国語総合

次の文章は、内田宗治『外国人が見た日本』からの一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、原則として句読点やカッコは一字に数えます。

明治期を通して、最も高名な日本研究者の一人にイギリス人のバジル・ホール・チェンバレンがいる。彼は明治六年(一八七三)二二歳のときお雇い外国人として来日し、後に東京帝国大学名誉教師となる。『古事記』の完訳を行ったことでも知られる。

「古い日本は、妖精よまぎの住む小さくてかわいらしい不思議な国であった」(『日本事物誌』)

彼は日本滞在が長くなったコウネンア、若いころ見聞きしたことを振り返って、「古き良き日本」(原文は Picturesque old Japan など)という言葉をよく使った。明治のはじめごろの日本には、西欧文明が出合ったことのないお伽とぎの国のような姿、「古き良き日本」があつたとチェンバレンは述べる。

チェンバレンに限らず、日本に長く滞在し日本と日本人を深く理解していた西欧人たちにとって、それは確実に実感されていた。彼らはいろいろと書き残している。

《中略》

町並みや自然の光景だけではなく、日本人の行動や暮らしも外国人の目をみはらせた。明治十一年(一八七八)、外国人未踏aの地だった東北から北海道へと旅したイギリスの女性旅行家イザベラ・バードの『日本奥地紀行』イでのチョジュツイがよく知られている。彼女は、旅の途中、物珍しさから部屋を覗のぞき見され無遠慮な視線に閉口1したり、旅館の自室でノミや蚊の大群に襲われながらも、しばしば民衆の無償の親切や助け合いの場面に合あって深く感銘を受けている。そうした人々の暖かさにふれることは、彼女にとって旅の途中の不愉快な出来事を補おぎなってあまりあるものだった。

「ヨーロッパの国の多くでは、またたぶんイギリスでもどこかの地方では、女性がたつたひとりよその国の服装をして旅すれば、危険な目に遭うとまではいかなくとも、無礼に扱われたり、侮辱されたり、値段をふっかけられたりするでしょう。でもここではただの一度として無作法な扱いを受けたことも、法外な値段をふっかけられたこともないのです」（『イザベラ・バードの日本紀行』）

「ここでは」とは福島県会津地方をはじめとする田舎での話である。バードは東京や横浜などの都会では狡賢い日本人にも逢っているのだが、田舎での体験を振り返って、日本人の実直さをややコチョコウぎみに描写するのを禁じ得なかった。彼女が東北・北海道への旅を終えて関西へと向かった際は、今の奈良県桜井市の三輪で三人組の人力車夫に出合う。彼らから、

「伊勢神宮へお参りして京都までの一〇日間、車夫として自分たちを雇ってほしい」

と頼まれた。このときバードに同行していたイギリス人女性（日本語を話せるギューリック夫人）が、

「あなたたちは推薦状をもっていないし、途中で放り出したり酒を飲み過ぎて走れなくなったりするかもしれない。人柄が分からないから雇えない」

と断ると、車夫たちは、

「死ぬまで忠実でいる。酒には手を出しません」

と熱心にいう。バードは彼らの、

「わたしたちも伊勢に参りたいんです！」

という言葉にほだされて、体の弱そうな一人を除いて二人を雇おうと伝えると、二人は、

「ひ弱な車夫には大勢の家族があつてとても貧しい。それで助けてやりたいのです」

とその車夫のために哀願してきた。それでとうとう三人とも雇うことになった。彼らは実に嬉しそうにして、その後最初に誓ったとおりあくまで温厚で律儀で感じがよく、おかげで旅は快適なものとなった。バードは仲間を思う車夫たちの行動に感じ入った。

チェンバレンが、日本には、「貧乏人は卑下しない。実に貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない」と観察したのも、庶民の間で仲間を大切にする意識、相互扶助の精神が存在していたことを示している。

大森貝塚を発見したことで知られるアメリカ人のエドワード・S・モースも、明治一〇年、日光を訪ねたときに通った栃木県の寒村の様子を、

「人々は最下層に属し、粗野な顔をして、子供は恐ろしく不潔で、家屋は貧弱であったが、然し彼らの顔には、我国の大都市の貧民窟で見受けるような、野獸性も悪性も、また憔悴した絶望の表情も見えなかった」（『日本その日その日』）と述べる。

もちろん古き日本には、醜悪な面も多かったろう。封建的な悪習、悪政、男尊女卑、リフジンな家父長制や身分制度、衛生觀念のケツジヨ、残虐な事件、そして様々な差別など。これらも実例を引用していけばいくらページがあっても足りない。バードも旅の途中、ほとんどの人が皮膚病をはじめあらゆる種類の病に冒されている村落を目にしている。だがそれら以上に外国人にとって驚きだったのが、人々が助け合う日常の姿だった。

物が盗まれることのないことにも、数多くの外国人が驚いている。モースは、

「人々が正直である国にいることは実に気持ちがいい。私は決して札入れや懐中時計の見張りをしようとしな。錠をかけぬ部屋の机の上に、私は小銭を置いたままにするのだが、日本人の子供や召使は一日に数十回出入しても、触つてはならぬ物には決して手を触れぬ」

という。また賄賂は日本武士道の誠の心に反するものとして、その悪習にふれることがなかったことにも、何人もの外国人が感銘を受けている。

日本人為政者が、外国人に日本の恥部をなるべく見せないよう行動エリアに制限をかけたことが、好印象を抱かせるうえで効果を上げたこともあるだろう。だが欧米人が目をみはる、異質な文明をもった人々の心のありようが、アジアのはずれのこの島国に少なからず存在した。彼らはそれに驚き、数多く書き残した。この点はまぎれもない事実である。

《中略》

いっぽう、こうした外国人らと同時代を過ごした日本人で、昔の社会、生活、風俗を振り返り、「古き良き日本」と述べた者はほ

とんど見かけない。少し時代が下つて永井荷風など一部の文学者くらいだろう。

過去の日本とはどんなものだったか、現代のわれわれはそれを誤解なく想像できているだろうか。幕末期以降の日本の姿は写真で見ることが出来る。文字に書かれたものも含め、われわれは当時の街の姿、自然風景、風俗、人情の一端を知ることができる。だがそれで全体を正しく理解できるわけではない。写真といつても、珍しいものをとりわけ選んで撮ったものかもしれない。写真を見てわれわれが日常の姿と感ずるものは、実は日常ではないよそ行きの姿の可能性もある。

やつかいなのは、「古き良き日本」というものが、徐々に失われていったものではないかもしれないことである。たとえば幕末や明治初期にはそれが色濃く太くあり、明治後期から昭和戦前と時が経るにつれて、しだいに薄く細くなつてくるといったものではなく、一度その文化のほとんどが消滅し断絶しているようなのである。

チェンバレンは、明治三八年（一九〇五）の『日本事物誌』第五版の序論において、西洋的近代化が日本社会に浸透してきたことを受け、「一八七三年に日本についた筆者は、（三〇年以上経った現在）もう四〇〇歳にもなったような気持ち」であり、「近代日本の大変革を表面から下まで潜つて研究した者」として、「古い日本は死んで去ってしまった」と書く。チェンバレンが武士社会の消滅をもつて古い日本は死んだと述べているのではないことに注意しておきたい。政治形態や統治形態ではなく、日本人の心性、生活様式全体の消滅を指しているのである。

明治・大正時代の外国人だけでなく、日本近代史家の渡辺京二も『逝きし世の面影』（一九九八年）において、チェンバレンらがいう古い日本、すなわち一八世紀初頭から一九世紀にかけて日本に存在した一つの文明が、明治半ばには消滅したと指摘する。同書は、幕末から明治にかけての外国人の日本に対する膨大な量の著作をもとに多くの引用を駆使しながらこの特異な文明の滅亡を浮かび上がらせたものである。ここでは、同書で短く指摘する文化人類学的側面についてだけ述べておきたい。

「滅んだ古い日本文明の在りし日の姿を偲ぶには、私たちは異邦人の証言に頼らねばならない。なぜなら、私たちの祖先があまりにも当然のこととして記述しなかったこと、いや記述以前に自覚すらしなかった自国の文明の特質が、文化人類学の定石どおり、異邦人によって記録されているからである」

自分たちの文化の特徴は当たり前のこととして意識されにくいので、あまり記述されない。異邦人にとってはその文化が印象的なので、彼らはそれを記述する。したがって一つの文明を読み解くには異邦人の記述が重要だと文化人類学では教える。

この考えでいけば、古き日本の良さについて当時の日本人は自覚していなかったことになる。

それにしても来日した西歐人たちは、なぜあんなに「古き良き日本」にこだわり、伝統文化が失われたことを嘆いたのだろうか。それは一つの文明を消滅させた日本人への関心だけでなく、西歐人自身の問題意識が大きかったためだろう。イギリスの歴史学者ホブズボウムは『創られた伝統』で次のことを指摘している。一九世紀末(明治時代半ば)―第一次世界大戦(天正初期)までの三、四〇年間は、西歐諸国においてナショナリズムがとくに高まり、そのための民族的アイデンティティが強く求められた時代だった。ナショナリズムを謳う人たちにとつては、民族の特性をはつきりと示すための「伝統的なもの」が必要だった。スコットランドで現在よく知られているタータンチェックやキルトなどは、伝統の象徴とするためにこのとき探し出された『創られた伝統』であるという。産業革命に端を発する近代文明は、西歐社会に画一化を促し、伝統を失わせた。いくら経済力や軍事力があつても手にすることのできない伝統というものを保持している日本は、羨ましい存在だった。だが日本はそのときまさに伝統を捨て去ろうとしていた。なんともつたいたく愚かなことをしているのか！

西欧知識人の中には、近代文明に対して閉塞感、不信任を感じている者も少なくない。「古き良き日本」を礼賛することは、その対極にある西欧近代文明への批判そのものといえた。

お雇い外国人として来日したドイツ人医師、エルヴィン・フォン・ベルツも、明治の世になつても武士道を受け継ぐ大名子弟の冷静さや礼儀正しさに感心する一方、日本の伝統を価値のないものとする多くの日本人に強い口調で警鐘を鳴らしている。

「なんと不思議なことには――現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。いや、何もかもすっかり野蛮なものでした」とわたしに言明したものがあつた(中略)その国土の人たちが固有の文化をかように軽視すれば、かえつて外人のあいだで信望を博することにもなりません」(『ベルツの日記』)

ベルツは、自分たちの歴史をどうでもいいように扱う人間など、信頼できないというのである。当時の西歐人には、前記のよう

に自分たちの「伝統を擁護^e」しなくてはならない理由があった。いつぼうで日本人には、外国と対等にわたりあうため富国強兵を推し進め、封建時代からの「伝統を壊す」必要があった。その相違がぶつかりあった時代での見解の相違である。

このことは、外国人と日本人との間で、日本の魅力に対する感じ方、ギャップの根深さを浮かび上がらせているように思える。

*問題作成上、文章の一部を変更しています。

問5 〰️線い「それら」とは何を指しますか。本文中の言葉を使いながら八字以内で答えなさい。

問6 〰️線う「現代のわれわれはそれを誤解なく想像できているだろうか」とありますが、筆者はなぜそのような疑問を持っているのでしょうか。

問7 〰️線え「古い日本」とは、何のことですか。

問8 〰️線お「古い日本は死んだ」とありますが、当時の日本人が気づかないそのことに、なぜチェンバレンは気づいたのですか。その理由となる部分を本文から探し、はじめと終わりの五字ずつを抜き出しなさい。

問9 〰️線か「創られた伝統」とありますが、①何が、②何の目的で「創られた」のですか。また、③なぜそれを創る必要があったのですか。それぞれ答えなさい。

問10 〰️線き「西欧知識人の中には、近代文明に対して閉塞感、不信感を感じている者も少なくない」とありますが、それはなぜですか。

問11 〰️線く「外国人と日本人との間で、日本の魅力に対する感じ方、ギャップの根深さ」とありますが、

① どのようなギャップがあるのか書きなさい。

② そのギャップはなぜもたらされたのですか。それはどのような意味で根深いのだとあなたは考えますか。一六〇字以上

二二〇字以内でまとめなさい。